

S-9 地域から ESD を推進する女性環境リーダー

○武中 桂^{1*}・遠藤 知二¹

¹神戸女学院大学人間科学部環境・バイオサイエンス学科 (〒663-8035兵庫県西宮市岡田山4-1)

* E-mail: k-takenakan@mail.kobe-c.ac.jp

1. 背景

神戸女学院大学(兵庫県西宮市)は、リベラルアーツ&サイエンス、国際理解、キリスト教主義教育を教育理念とする学生数2,700名ほどの小規模な女子大学である。この教育理念のもと、環境科学や生命科学を学ぶ自然科学系の学科が置かれ、国際的な視野をもち、地域社会に対して共感性の高い人間を育てることを目指している。これまでも、大学の立地する西宮市との密接な関係を保ちつつ、地域のさまざまな活動に携わってきた。特に西宮市は古くから地域の環境問題に積極的に取り組んでおり、日本で最初に「環境学習都市宣言」を行った自治体であることから、本学も「大学としての立場」からこれらの取り組みに参画している。

たとえば、地元の小学生を対象とした「こどもサイエンス体験」、中学生・高校生を対象とした「サイエンス体験」などの催しでは、各学校との協力のもと自然科学の立場から環境問題に取り組む姿勢を子供たちと一緒に考えてきた。また、地域住民を対象とした「遺伝子組み換え食品フォーラム」やNPO「シニア自然大学」と提携した講座や観察会などを定期的開催し、市民レベルでのサイエンスリテラシーの涵養にも力を注いできた。さらに、女子大学であることの特長を生かして、今日において女性はどうな役割を果たしながら地域社会の活性化に取り組むべきかという課題について、男女共同参画の立場からもさまざまな実践的試みを続けてきた。

2. 本学での取り組み

本学人間科学部は、環境・バイオサイエンス学科と心理・行動科学科の2学科で構成されており、理系の学生と文系の学生が同じ土俵に立って相互に学び合うことができる。そのため、これまでも多角的な視点に立ちながら地域の活性化を目指した試みを実施してきた。たとえば2007年度には、文部科学省の「現代的教育ニーズ取

組支援プログラム」として選定された「活力ある地域社会を創る女性リーダー養成」プログラムを立ち上げた。このプログラムでは、学生が自ら地域を活性化するための企画を立案し、実行出来る能力の養成を目標としている(具体的には、2年次に「地域活性化論」「NPOマネジメント論」、3年次に「地域活性化総合実習」、4年次に「プレゼンテーション演習」を履修し、最終的には一般公開の場での発表を行う)。2年間にわたるプログラムの総決算として、プログラムを通じて得られた学びと体験を広く地域の住民と共有することができる。本プログラムでの学生の成長は著しく、助成期間終了後も全学の副専攻制度として発展的に継続して行っている現状である。このような学部での取り組みは、専門知識を持ったボランティアや自治体職員、NPO職員などとして、卒業後もさまざまな局面で地域の活性化に参画する力を学生に与えるものであると考えている。

さらにこれらの経験を地域活性化のための専門職として発揮することを希望する学生のために、本学人間科学研究科においても「環境と健康のために行動する女性科学者養成」プログラムを開設した。本プログラムは、人間科学研究科の人間行動学、環境科学、健康科学の3分野の大学院生が、それぞれの専門分野での研究成果を地域社会に還元することを目的としており、文部科学省の「大学院教育改革支援プログラム」に選定された。プログラムでは、多様な分野で実際に地域活性化活動を行っている研究者を講師として招聘する「大学院セミナー」、異なる科学分野や社会活動の現場に飛び込む「インターンシップ」、研究成果を市民に伝えるための「サイエンス・アウトリーチ」を中心に実践的な学びを行うが、もうひとつの特色として、現代の地域社会の複雑さを反映し、科学英語の履修にも力を入れた。「サイエンスのための語学研修」により集中的に実用的な科学英語の学習を行うほか、本プログラムを履修した大学院生は韓国やマレーシアなどのアジア各国でのインターンシップを行っており、国際化が進む日本の地域社会の現状に対応するためにも、また、地域の問題に国際的な視点から取り

組むためにも、有意義なプログラムとなっている。

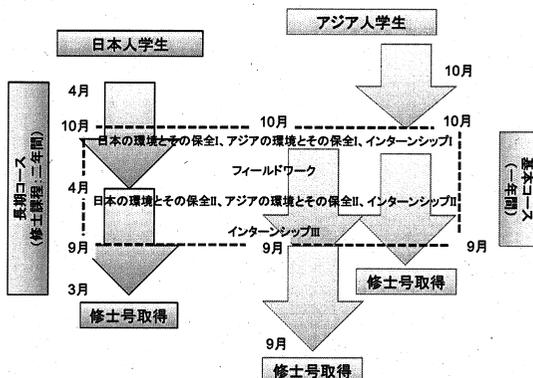
3. アジアとの連携 - 「地域からESDを推進する女性環境リーダー」育成プログラム-

以上見てきたような学部、大学院を通しての取り組みでは、プロジェクトやアウトリーチに参加した住民と学生との交流がプログラム終了後も継続しており、大学と行政、NPO とが連携して持続的な地域社会づくりを推進するモデルを構築できる可能性が見えてきた。ESD (Education for Sustainable Development: 持続可能な開発のための教育) の推進には地域社会に根ざし、グラスルーツで実践していくリーダーの養成が欠かせないであろう。本学が地域と連携しながら培ってきた取り組みを、アジアやアフリカなど ESD が急務となっている地域社会で具現化し、同時に日本の地域社会に国際的視野を導入しながら ESD の基盤を強化することが、多くの地域社会での活動と連携することで可能なのではないだろうか。このモデルを多面的に検証するため、2009 年度より文部科学省の科学技術振興調整費「アジア・アフリカ科学技術協力の戦略的推進・戦略的環境リーダー育成拠点形成」の助成を受けて、「地域から ESD を推進する女性環境リーダー」育成プログラムを開始した。本プログラムでは、従来の取り組みをさらに発展させ、アジア・アフリカ地域の大学院で環境分野を学ぶ女子大学院生を受け入れて日本人大学院生と共に実践的に ESD の手法を学ぶコース (1年間) を開設している。

このコースでは、日本の ESD の経験とわれわれの西宮市での実践を、アジア各国が直面する環境を中心とする ESD の諸問題と比較検討することにより、日本とアジアの女子大学院生が国際的、多元的視点から ESD について相互に学び合うことを目的としている。そのために、双方向性のインターネットビデオ会議システムでアジアの諸大学と結ぶライブ講義「Environmental Issues and ESD Progress in Asia」、日本の行政組織、企業、NPO と大学が共同で行うリレー講義「Environmental Issues and ESD Progress in Japan」と、先駆的に ESD を実施している NPO (西宮市) での長期の「インターンシップ」、実践的に ESD に取り組んでいる国内事例を現地で体験的に学ぶ「フィールドワーク」の4つを相互補完的に組み合わせたカリキュラムを用意している。その上で、地域に根ざした女性による実践的活動の重要性の理解を通じて市民レベルで活躍できる環境リーダーの養成を目指している。

下記のような見出しのつけ方や図表の配置方法を含

図1. 本プログラムのイメージ



4. 本プログラムの成果

上記のとおり、本プログラムは1年間を基本コースとしており、2010年10月に第1期留学生を受け入れて以降、2012年9月末時点において2年間分のプログラムが終了している。当初5年間で留学生20名、日本人学生20名の修了を目指していたが、現時点での各年度における留学生の受入状況は2010年インドネシア1名、マレーシア1名、中国1名、フィリピン3名、ベトナム2名(合計8名)、2011年度インドネシア1名、マレーシア1名、韓国1名、中国1名、フィリピン1名、ベトナム1名(合計6名)である。また日本人大学院生の本プログラムの修了に関しては、2011年度に1名(本学人間科学研究科)が修了しており、2012年度にも3名(本学人間科学研究科)が修了見込みである。

また、本プログラムでは適宜シンポジウムや講演会等を開催することにより、その成果を学内外へ公開している。2010年度にはキックオフシンポジウム、2010年度以降にはミニシンポジウム(海外からのゲスト講師によるプレゼンテーション)を開催したり、学生による一般への報告の場(本学アセンブリーアワー内での一般向け報告)を設けたり、プログラム修了に際する報告会(学内および学外本プログラム担当講師向け報告会)を開催したりするなど、コンスタントに情報を公開している。

5. 本プログラムの課題

2009年より採択となった本プログラムであるが、実働的に動き始めて2年が経過した(上述のとおり、学生の受け入れは2010年9月より)。現時点においては、第1期生ならびに第2期生が本プログラムを修了した段

階である（第3期生は、2012年9月末に中国（2名）、インドネシア（1名）、フィリピン（1名）、ベトナム（1名）より来日予定）。これまでのところ、プログラムの内容そのものに関して特に問題はないが、開始当初の修了生の目標数に対して実際の日本人学生の修了者数が下回っていることを今後改善すべき課題として指摘することができる。この点に関しては、学内外での日本人大学院生の募集方法について再検討することが必要であると考えられる。また、本プログラムは5ヵ年計画での採用であることを踏まえると、採択期間終了後のプログラムのあり方（どのような方法ならびに位置づけで継続させるか）といった点についても、関係者間での議論を詰める必要がある。

本プログラムの有効性を検証するためには今暫くの時間を要する。ただし、われわれがめざす大学と行政、企業、NPO とが連携した新たな地域活性化の方向性を留学生に伝えることにより、彼女たちがそれぞれの出身国に戻ったのちに、国際的な視点とネットワークを持ちつつ、自国の地域に根ざしてESDを推進する女性リーダーとして、活躍することを期待している。また、共に学んだ日本人大学院生も、留学生との交流を通じてアジアの現状を学ぶことにより、新たなESDの可能性を見出し、各自の生活する地域で実践していくことが期待される。

図2. 本プログラムの今後の展開イメージ

